

2022年2月

## 今月の新着図書から

スティーヴン・ジェイ・グールド『進化理論の構造』I, II,

渡辺政隆訳（工作舎, 2021年）

高等科図書主任

林 知宏

スティーヴン・ジェイ・グールド（1942-2002）は、ハーヴァードで教鞭をとった古生物学・科学史の研究者である。早世した彼の遺作である畢生の大作が今回の書である。ダーウィンの創始した進化論の歴史的発展をたどりながら、現代における論争（グールド自身がその担い手である）について、自説を中心に他説を批判的に紹介しつつ包括的に論じている。何しろ原書（*The Structure of Evolutionary Theory* (2002)）が1433頁、この翻訳書がI, II巻合わせて1907頁にも上る分量である。まさに超弩級のボリュームで、安易な要約など寄せつけない。私も昨年暮れに購入して正月休みに読み進めたが、実はまだ読了するに至っていない。だが、早く紹介したいとの一念でここに記す次第である。

進化論は、周知の通りダーウィン『種の起源』（1859年刊、岩波文庫、光文社古典新訳文庫から刊行）によって一時代を画することになった理論である。「自然淘汰」、「適者生存」という象徴的な用語で語られる。今や科学の世界を越えて、ビジネスやスポーツにも援用されることも多い。ただ、進化はまさしく何万年もの単位で起こる事柄なので、その適者生存にしてもなかなか検証が伴わない。したがって、どのようなものが歴史において適者であったのか？絶滅種は化石にしか存在せず、現在生存しているもののどれが適者として残存するのか？これからどの種にいか自然選択が働くのか予測し難い。ともすると生存しているものが適者であるという、一種のトートロジーにさえ陥りかねない。もともと通常科学の検証可能性が担保されにくい分野なので、とかく論争が絶えない分野でもある。ただ宇宙論と並んで無条件に興味深い。白亜紀（6500万年前）の恐竜絶滅は天体衝突によるという説が有力だが、そのように偶然性も要素に加わる。グールド（断続平衡説を唱える）と『利己的遺伝子』の著作で知られるリチャード・ドーキンスとの論争については、吉川浩満『理不尽な遺伝子』（ちくま文庫）でも手早く知ることができる。

グールドはマンハッタンで少年時代を過ごし、熱烈な野球ファンとしても有名である。メジャーリーグ愛好者ならば必見のドキュメンタリーフィルム *Ken Burns, Baseball*（Amazonで購入可）にも登場し、1950年代の思い出を熱く語っている。長年、一般に向けて進化論に関するエッセイを書き続けた。中でも『フラミンゴの微笑』（ハヤカワ文庫）に収められた4割打者の絶滅に関わる論考と付随する1956年ワールドシリーズにおけるドン・ラーセンの完全試合をめぐるエッセイは秀逸である。こちらも一読に値する。